

上座仏教と大乘仏教の仏陀

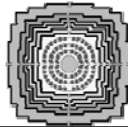
- 上座仏教
 - 時系列: 千仏、過去28仏(一仏説)
 - Dipamkara(燃燈仏): 4番目
 - 釈迦牟尼: 28番目
 - 弥勒仏: 未来の仏陀
- 大乘仏教
 - 時系列: 過去7仏
 - 同時別世界: 十方仏土(多仏説)
 - 西方極樂浄土: 阿弥陀仏など

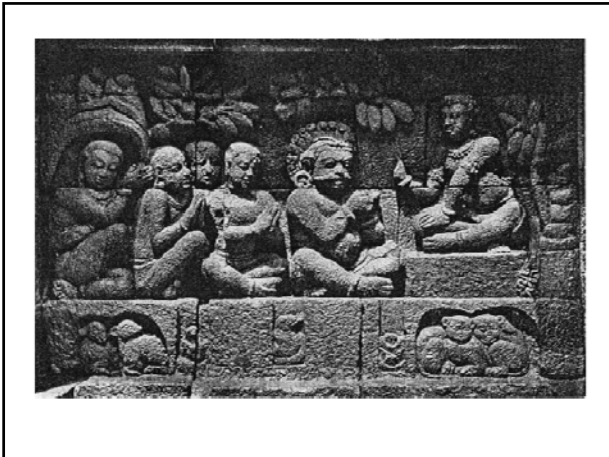
7世紀以降の東南アジアの仏教

- 部派仏教(上座部・有部)・大乘(密教)併存の時代
- 「あるいは大乘をとき、小乗をとき、あるいは実教をひろめ、権教をひろむ」(黒谷上人語灯録)
- 『南海寄帰内法伝』(義浄、7世紀)

ジャータカにおける「スタソーマ王子本生」

- パーリ語ジャータカ第537話
- サンスクリット語ジャータカ・マラー第31話
- ボロブドゥール寺院浮き彫り
- 第1回廊欄循上段第116-119面(南西部)





ボロブドールの仏教

- 五仏思想
- 『金剛頂経』
 - 第1層～第4層ニッチ
 - 東側...阿閼如来(触地印)
 - 南側...宝生如来(与願印)
 - 西側...阿弥陀如来(禅定印)
 - 北側...不空成就如来(施無畏印)
 - 第5層四面ニッチ
 - 毘盧遮那仏=大日如来Mahāvairocana (法身說法印)
 - 円壇小ストウーパ
 - 釈迦如来(転法輪印)



『スタソーマ・カカウイン』

- 14世紀 マジャパヒト王国
- 仏教徒詩人ムプ・タントゥラル
- 古ジャワ語 貝葉(ロンタル)
- スタソーマという主人公
- 人食いの調伏というテーマ
- 菩薩の転生⇒大日如来の転生

「仏伝」としての骨格

- 「仏伝」の骨格
 - 王子としての出生
 - 結婚・家族⇒結婚前に出家
 - 出家・修行・悟り(ブツダ)⇒出家・修行・悟り(大日如来)
 - 出家者として布教⇒即位、王として結婚・家族、敵への対処
 - 菩薩としての道: 知恵と慈悲(自利と利他)

ヒンドウーの英雄の特徴

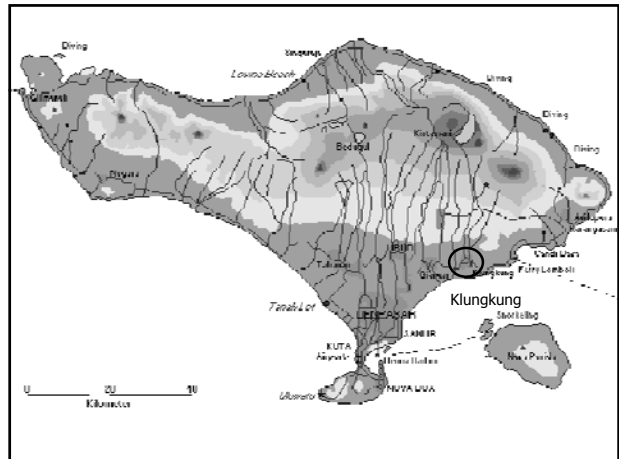
- 『マハーバーラタ』におけるアルジュナの苦行
 - 山中で苦行
 - 神から恩寵(武器)⇒大日であることの自覚
 - 悪鬼を倒す⇒悪鬼を調伏

バリ島のヒンドウー化

- 9世紀 古バリ語の碑文出土
- 11世紀以降 東ジャワ王権と親族関係
- 1343年 マジャパヒト王国による征服 →バリのヒンドウー・ジャワ化
- 16世紀 ジャワのイスラーム化 →「ヒンドウー・ジャワの周辺」から「中心」へ →Wong Majapahit意識の形成

クルンクン王朝

- 16世紀 ゲルゲル王朝の興隆
- 17世紀 ゲルゲルからクルンクンへ遷都
→王国の分裂。9王国の並立。
- 1908年 クルンクン王国、オランダ軍に敗北
- 1940年代 バレ・カンバンなどの再建
- 1942年 スタソーマ物語の天井画作成
 - カマサン様式(ワヤン様式)
 - 数次の改修を経る



バレ・カンバン

- バレ=「亭」、カンバン=「花」
- 濠に囲まれた平面約4×8mの基壇に作られた吹き抜けの屋根。
- 天井画は上から下へ6層
- スタソーマ物語は南の第1層から始まり、西→北→東→南の第2層という順番に、東の第4層で終わる。
- 第5層はパン・ブラユット物語、第6層は占暦

物語の構造

釈迦牟尼	ラーマ	スタソーマ
誕生(転生)	誕生(ヴィシュヌ神の転生)	誕生(大日如来の転生)
結婚	結婚	出家
出家	追放	修行
修行	戦争(ラーヴァナを倒す)	成道(本性の自覚)
成道	即位	結婚
伝道	天界への帰還	即位
涅槃		戦争→失敗
		調伏
		天界への帰還

「不二一元論」

- 聖(僧)=俗(王)
- 仏陀の教え=シヴァの教え
Bhinneka Tunggal Ika
- 王(武力)⇒王=僧(非暴力ahimsā)
- 物語としてはヒンドゥー教(シヴァ派)に対する優位を含意。

Bhinneka Tunggal Ika 「多様性のなかの統一」



『スタソーマ・ジャータカ』(パリー語ジャータカ第537話)の概要 ver 2.3_2013-02-07

(現在物語)

アングリマーラ(漢訳仏典では央掘摩羅、指鬘外道と呼ばれる)は残虐非道な盗賊であったが、仏陀を襲って殺そうとしたとき、かえって教化されて出家し修行に励み、のちには大長老の一人として認められるにいたった。そのことを不思議に思った比丘たちに仏陀は、「この私が今この者を教化したからといって不思議なことではない。私が前生においてまだ修行を積む身で、不十分な知恵しかなかったときですら、この者を調伏したことがあったのだ」と言って、過去のことを話された。

(過去物語)

第1部

1. ボーディサッタ(菩薩。仏陀が悟る前の前生の存在)はコーラヴァ王家の王子として生まれ、スタソーマと名付けられた。王は、王子が成年になると学芸を習得させるためにタッカシラーにつかわした。
2. その頃、パーラーナシーのカーシ国の王子ブラフマダッタ・クマーラも同じように言われ、その道を進んでいた。
3. タッカシラーで出会った彼ら二人は「自分たちは王族の生まれで同じ師匠のもとで学芸を習得するために来たのだ」ということで互いに親交を深め、師匠のもとで学芸の修得に励んだ。その時、師匠のもとには、他にジャンプ洲(インド全体のこと)の百人もの王子が学芸を修めにきていた。
4. スタソーマは、第一の弟子となり奥義をきわめた。彼は、ブラフマダッタ・クマーラのところへ行き、補助の師匠となって学芸を上達させてやった。
5. 他の者たちも習得し終え、スタソーマと共に帰途についた。スタソーマは彼らに「半月毎に齋戒(ウポーサタ)を守り、決して殺生してはならぬ」と忠告した。実は、ボーディサッタは人相術を心得ていたので、将来パーラーナシーの王子の身に大変な危険が起こることを知り忠告したのである。

第2部

1. パーラーナシーに帰国し、王位を継いだブラフマダッタ・クマーラは肉なしでは食事をしなかった。ある日、調理人が用意していた肉が犬に食べられてしまった。調理人はどうしても市内で肉を得ることができず、夜遅く墓地へ行き、今死んだばかりの男のもも肉を取って来た。そして、これを料理して王に差し出した。王は、前世では夜叉に生まれて多くの人肉を食べ、そのため彼には、それが何とも好ましいものであったのである。そこで、調理人を脅して肉が人肉であることを知ると、調理人に命じて常に人間を供するように命じた。初めは牢獄の罪人を殺して肉を取ったが、それがつきると次第に市内で人を殺して人肉をとるようになった。
2. 市内に人殺しがいることに気づいた市民は王に助けを求めたが、王は取り合わなかった。そこで市民はカーラパティ将軍に助けを求めた。将軍は、調理師を殺人の現場で捕まえたが、調理師は王の命令でやったと告白した。将軍が王に問いただすと、王はそのことを認めたので、将軍はさまざまな例え話を持ち出して王に人肉食いの悪行をやめさせようとした。しかし、王もさまざまな例え話を持ち出してやめることを拒んだので、そこで、王を国から追放した。
3. 彼は森の中へ行き、ニグロダ樹(インドネシア語:バンヤン樹。ベンガル・ボダイジュ)の根元に住居をかまえ、人を捕まえては殺して食べていた。
4. ある日、一人の富豪バラモンが森を通過しようとしていた。人喰いはバラモンが食べたくてたまらなくなり、かついでさらって行った。しかし、一人の勇敢な男が人喰いに追いついたので、人喰いは逃げ出したが、そのとき木の棘を踏んで足に傷を負った。人喰いは、人々が追いかけて来たので、バラモンは放り投げ身の安全をはかった。
5. 人喰いは、自分の住居に戻ってニグロダ樹の女神に「もし七日間のうちに傷を治してくれたら、ジャンプ洲中にある百一人の王を捕まえて殺し、その血肉を捧げましょう」と誓いをたてた。傷は七日間のうちに治り、人喰いは女神の威力によって回復したと思いこんだ。
6. 数日後、人喰いは諸王を捕まえて来ようとして出発した。すると、前世において夜叉であったときの仲間の夜叉にあった。その夜叉から呪文を受けられた人喰いは、風のように速くなりとても勇敢になった。
7. 人喰いは、七日間のうちに百一人の王たちを捕獲した。しかし、スタソーマだけは「自分の補助の師匠であった」ということと、「ジャンプ洲から王族が空っぽになってはいけない」ということで連れてこなかった。

8. 人喰いがいよいよ儀礼をしようとしたとき、樹神は「傷が治ったのは私のおかげではない。それなのに大虐殺が行われようとしている。どうすればいいのか」と思い、インドラ神(パーリ語:サッカ。帝釈天)のところへ相談に行った。するとインドラ神が「スタソーマならやめさせることができる」というので、樹神は人喰いに対して、スタソーマを捕まえて自分に捧げるよう、告げた。そこで、人喰いはスタソーマが王国の御苑にいることを知ると、彼を捕まえるために御苑の中に侵入した。

第3部

1. その日の早朝、スタソーマはナンダという名前のバラモンに出会っていた。バラモンは百金に値する四つの偈(4行の定型詩)を教えにきたのであった。スタソーマは(慣習上)先に御苑で沐浴する必要があるため、バラモンに休憩する場と衣食を与え、沐浴から戻るまで待つように言って、御苑に入った。
2. 御苑で沐浴する最中のスタソーマを人喰いが捕獲して連れ去った。人喰いは、スタソーマの髪から水滴が落ちたのを見て、死を恐れて泣いていると思った。しかし、スタソーマは「バラモンとの約束を果たせないことを嘆いているのだ」と言い、バラモンとの約束を果たすまで、釈放するように求めた。人喰いは初めは信用しなかったが、スタソーマが宣誓をしたので信用し、放してやった。
3. スタソーマは都へ着くとバラモンから百金に値する四つの偈を聞いた。スタソーマは一つの偈につき百金でなく、千金を与えた。
4. このことを聞くと、財宝に貧欲な両親はスタソーマを怒った。
5. それに対して、スタソーマは父に、自分は財宝ではなく知識の増大を望むのだと告げ、王位を父に譲って、人喰いのところへ帰ろうとした。
6. 父は四軍の兵をもって賊を捕まえようと言うが、スタソーマは「なし難いことをした人喰いを裏切ることはできない」と言って人喰いのもとへ戻った。
7. 人喰いは、スタソーマが死の恐怖も抱かずに戻って来たのを見て、その理由が四つの偈にあるのだろうと推測し、その偈をスタソーマから聞こうとした。スタソーマは初めつっぱねるが、問答のすえに、人喰いが従順になったところで法を説いた。
 - (1) 善き人とつきあうこと。
 - (2) 善き人と親しくすること。
 - (3) 善き人の法は決して滅びないこと。
 - (4) 正法と悪法の間距離がいかにか大きいということ。
8. スタソーマから偈を聞いた人喰いは歓喜の念に打たれ、四つの恵みを施すことを申し出た。スタソーマは以下の恵みを申し出た。
 - (1) 人喰いが百歳まで健康であること。
 - (2) 捕獲された諸王を食べないこと。
 - (3) 捕獲された諸王を自国に帰還させること。
 - (4) 人喰いが人肉を食べるのをやめること。
9. 人喰いは、第四の恵みは無理だと言ったが、スタソーマは人喰いを説得し、ついに人肉を食べる習慣をやめることを誓わせた。
10. スタソーマは諸王に人喰いを害さないことを約束させたのち、彼らを解放し、休養させた。人喰いはパーラーナシーに帰ることを躊躇していたが、スタソーマに説得されて帰国することを決意する。
11. パーラーナシーでは王の息子が王位につき、カーラバッティ将軍が国を守っていた。人々は人喰いの帰還に驚いたが、スタソーマは彼らに人喰いの改心を説明し、法話を説き聞かせ、人喰いを再び王位につかせることができた。ジャンプ洲中の人々がスタソーマの偉業を賛嘆した。

(結合)

仏陀はこの法話をされた後、「比丘たちよ、その時の人喰い王はアングリマーラ、カーラバッティはサーリプッタ(漢訳:舍利佛)、ナンダはアーナンダ(漢訳:阿難)、樹神はカッサバ、インドラ神はアヌルッダ、他の諸王は仏陀に従う人たち、両親は今の大王の一家であって、スタソーマ王こそは私であった」と語った。

スタソーマの概要:スタソーマの主要登場人物の紹介とあらすじ ver 1.3 2015-02-05

スタソーマ Sutasoma. 別名「プルシャーダ・シャーンタ」(調伏された人喰い). マジャパヒト朝の宮廷詩人 タントゥラル (Tantular) 作のカカウイン (韻律詩). 148 詩篇. 1365-89 年頃に成立.

- ・物語の時間/物語の空間/間テキスト性/コンテキスト性 (青山 1995, 1997b)
- ・スタソーマ・ジャータカ (パリー語ジャータカ第 537 話) (青山 1986)
- ・バリ島クルンクン旧王宮のバラ・カンバン天井画 (青山 1997a)

1. 登場人物

マハーケートウ Mahāketu	ハスティナに都するクル族の王. スタソーマの父.
スタソーマ Sutasoma	ハスティナの王子. マハーケートウの息子.
ケーシャワ Keśawa	聖仙.
スミトラ Sumitra	聖仙. スタソーマの母の伯父.
ダシャバーフ Daśabhāhu	スタソーマの母方のイトコ. カーシー国の王. チャンドラワティーの兄. ブラフマー神の恩寵の子.
チャンドラワティー Candrawatī	スタソーマの母方のイトコ. ダシャバーフの妹.
アルダナ Ardhana	スタソーマとチャンドラワティーの息子.
プルシャーダ Puruśāda	「人喰い」. 本名ジャヤーンタカ. ラトナカンダ国の王.
ガジャワクトラ Gajawaktra	「象頭」. 象の化け物. ガネーシャ.
ティロータマー Tilottamā	天女.
ワイローチャナ Wairocana	密教の教主としてのブツダ. 毘盧遮那仏. 大日如来.
ローチャナー Locanā	ワイローチャナの明妃.
デーワンタカ Dewantaka	アワンガ国の王. プルシャーダの同盟者. コーシャの兄.
コーシャ Kośa	マガダ国の王. プルシャーダの同盟者. デーワンタカの弟.
インドラ Indra	神. 帝釈天.
ブラフマー Brahmā	神. 梵天. 宇宙の創造を司る.
シワ Śiwa	神. シヴァ. 宇宙の破壊を司る.
ヴィシュヌ Viṣṇu	神. ヴィシュヌ. 宇宙の維持を司る.
ルドラ Rudra	神. シワ神の別名.
カーラ Kāla	神. インドでは「時間」の意で死の神ヤマ (閻魔) の別名. ジャワでは死と破壊をもたらす鬼神. 現代ジャワ語コロ (Kala)

2. あらすじ

- 1) 【スタソーマの誕生】カリの時代, ハスティナに都するクル族の末裔マハーケートウ王は, 悪鬼らの跳梁に悩まされていた. 悪鬼退治の希望を未来の王子に託した王の祈りに応じて, ワイローチャナ (Wairocana, 毘盧舍那, 大日如来) 自身が王子として誕生 (転生) し, スタソーマと名付けられる.
- 2) 【スタソーマの出家】王子は, 人々の期待に反して, 悟りを求めて秘かに王宮を抜け出し, 修行の旅に出る. 墓地で瞑想中に現れた女神にスメール山 (Sumeru, 須弥山) で修行するように勧められたスタソーマは, 旅の途中の庵でケーシャワ尊者に会う. 尊者はスメール山まで王子に同行することになる.
- 3) 【スミトラ尊者】旅を続けるスタソーマは山中の庵でスミトラ尊者に出会う. スミトラ尊者はスタソーマの母方の大伯父である. スミトラ尊者はスタソーマに以下の物語を語り, スタソーマだけが世界を救えるかと訴えるが, 王子の求道の決意は揺るがない.

【スミトラ尊者の物語】

カーシー国の王 (スミトラおよびスタソーマのきょうだい) はブラフマー神の恩寵を得て息子ダシャバーフを授かる. 父王が死去したあと王位を継いだダシャバーフはハスティナ王と同盟を結び, 悪鬼たちの退治に力を注いでいる. また, 彼の妹 (スタソーマの妹) チャンドラワティーはスタソーマの妻とな

るのにふさわしい女性である。一方、前生においてブッダによって調伏された悪鬼シュチローマは、ラトナカンダ国の王子として転生している。ルドラ神(シヴァ神の別称)に帰依した王子は悪鬼の本性がよみがえり、今ではプルシャーダ(人喰い)と呼ばれ、悪鬼の軍隊を率いて人々を襲うようになって世界中の人々から畏怖されている。これを退治できるのはブッダの転生であるスタソーマだけである。

- 4) 【三匹のけだものとの出会い】スメール山頂へ向かうスタソーマの一行は深い森を通過する。森のなかでガジャワクトラ(象頭の化け物)が襲いかかるが、スタソーマの瞑想の力によって調伏される。さらに進むと大蛇が襲いかかるが、これもガジャワクトラとスタソーマによって調伏される。さらに進む一行は、空腹に苦しむ雌虎が自分の子を食おうとするところに出会う。スタソーマは子虎を解放し、雌虎に自分の体を与える。スタソーマの血を飲んだ雌虎が犯した罪に気づき後悔しているとインドラ神が現れ、スタソーマを生き返らせる。山頂についたスタソーマは弟子となった三匹にシワ派のヨーガ修行と仏教の不二(advaya)のヨーガの教えなどを説いたあと、一人となって山頂に行き瞑想に入る。
- 5) 【スタソーマの本性顕現】瞑想に専念するスタソーマの心を俗界に引き戻してプルシャーダの調伏に向かわせようと、インドラ神はティロータマを初めとする天女たちにスタソーマの誘惑を命じて送り込むが失敗する。そこでインドラ神自らが美しい女神に変身してスタソーマを誘惑しようとする。その瞬間、神々の意を察したスタソーマがワイローチャナの姿に変じると、その前にインドラ神他の神々や聖人たちが集まり、スタソーマにプルシャーダの調伏を祈願する。
- 6) 【ダシャバーフとの出会い】神々の願いを聞き入れたスタソーマは王子の姿にもどり、ケーシャワ尊者とともに飛行して山を降りる。偶然の機会からスタソーマはダシャバーフと出会う。ケーシャワ尊者の説明でいとこ同士と知ったダシャバーフは大いに喜び、スタソーマをカーシー国に招き、妹のチャンドラワティーを妻として与えることを申し出る。
- 7) 【カーシーへの旅】カーシー国への旅の途上、一行は廃墟となったアワンガ国を通過する。ダシャバーフはそれを見て事情を説明する。

【ダシャバーフの物語】

アワンガ国のデーワンタカ王とそのきょうだいであるマガダ国のコーシャ王がそれぞれダシャバーフの妹(チャンドラワティー)と近親の王女との結婚を申し出たとき、ダシャバーフが拒否したために、戦争がおこった。ダシャバーフに破れた二人の王は国を逃れてプルシャーダと同盟を結んで今にいたっている。

- 8) 【チャンドラワティーとの結婚】カーシー国についてスタソーマはチャンドラワティーと盛大な婚礼の儀式をへて結婚する。初めはチャンドラワティーは結婚に不本意であったが、前生においてワイローチャナの妃ローチャナーであったことを自覚する。新婚の夜、二人は自分たちが前生においてワイローチャナとローチャナーであったことを想起する。
- 9) 【スタソーマの帰還と即位】スタソーマは妃とダシャバーフを伴ってハスティナ国へ帰還する。美しくロマンティックな旅の情景の描写。スタソーマは父王に代わって王位につき、ダシャバーフは守備隊長としてハスティナ国に留まる。
- 10) 【プルシャーダの百王捕獲】その頃、足の傷から重い病にかかっていたプルシャーダは、傷が回復すれば100人の王を犠牲に捧げようとカーラ神に誓いをたてる。首尾よく治癒すると、悪鬼の軍団を率いて99人まで王を捕獲する。シンハラ国のジャヤウィクラマ(実はウイシュヌ神の転生)が抵抗の

末に戦死したので生け捕ることができなかったが、計略によって 100 人めの王を捕らえるのに成功しカーラ神に捧げる。しかしカーラ神は捕獲された王たちに不満を示し、唯一無比の生け贄としてスタソーマを要求する。プルシャーダとその軍団はハスティナ国へ進軍を開始する。

- 11) 【プルシャーダのハスティナ攻撃】スタソーマは自らを犠牲に捧げることで戦闘を回避することを希望するが、ダシャバーフたちは抗戦の道を選び、戦闘が始まる。多くの死者を出す激戦の末、ルドラ神の姿に変身したプルシャーダがダシャバーフを倒し、一時は優勢だったハスティナ側の軍団は壊滅する。
- 12) 【スタソーマのプルシャーダ調伏】ついにスタソーマ自身が単身で戦場におもむきルドラ神と対面する。ルドラ神は世界を焼き尽くす劫火に変身してスタソーマを焼き殺そうとするが効果はない。その火が世界を破壊しそうなのを見て、神々が降下し、「ブッダとシヴァ神の本質は一つなり」(bhinneka tunngal ika) という主旨の文句を唱え、ルドラ神に世界を破壊しないよう懇願する。スタソーマが智拳印を結んで念じると、プルシャーダの体からルドラ神が去り、力を失ったプルシャーダは自身の非を悔いる。
- 13) 【スタソーマのカーラ神調伏と天界への帰還】スタソーマはプルシャーダに命じて自分をカーラ神の所へ連れて行かせ、捕獲された王たちを解放させた後、自らの体をカーラ神に捧げる。蛇に変身したカーラ神は彼を呑み込むが、逆に調伏されてしまう。仏門に入ったプルシャーダとカーラ神にスタソーマは教えを説く。戦死者たちはインドラ神の力によって生き返り、祝宴が開かれる。世界に平和と秩序が回復する。スタソーマと王妃が修行の結果、天界に帰還した後、息子アルダナがハスティナ国を治める。

参考文献

- 青山亨 1986 「古ジャワ文学におけるスタソーマ物語の受容と変容」『東南アジア研究』24 (1): 3-17.
- 1994 「ラーマ、ラーヴァナ、ハヌマーン—ポリフォニーとしての叙事詩とその英雄たち」『しにか』1月号. 5 (1): 62-67.
- 1995 「アルジュナウイジャヤからスタソーマへ—歴史的な脈の中の二つの古ジャワ語文学作品」『東洋學報』77 卷 1-2 号. pp.01-033 (200-232).
- 1997a 「バリ島クルンクン旧王宮の天井画に描かれた『スタソーマ』物語: 図像テキストへのひとつのアプローチ」『東南アジア史の中の「中央」と「地方」』平成 6~8 年度文部省科学研究費補助金 (国際学術研究) 研究成果報告書. 吉川利治 (編). pp.134-152. (大阪外国語大学西日本地区東南アジア史研究会).
- 1997b 「古代ジャワ社会における自己と他者—文学テキストの世界観」『地域のイメージ』(地域の世界史第 2 卷) 辛島昇・高山博 (編). pp. 94-137. 東京: 山川出版社.
- 石井米雄・他編 1991 『インドネシアの事典』京都: 同朋舎. とくに「ジャワ文学」「スタソマ」「タントゥラル」の項目.
- O'Brien, Kate. 2008. *Sutasoma: The ancient tale of a Buddhist-Prince*. Bangkok: Orchid Press.
- Soewito Santoso. 1975. *Sutasoma: A Study in Javanese Wajrayana*. New Delhi: International Academy of Indian Culture.